

LEADERS NOW!



“魔女プロジェクト”で、社会問題解決を目指す

廃棄商材を生まれ変わらせるビジネスプラン

●学部 横山恵子ゼミ

4年次生 村松 晃太郎 さん (2000年 大阪府八尾市生まれ)

4年次生 竹内 乃重 さん (2000年 兵庫県丹波市生まれ)

3年次生 中山 雄賀 さん (2001年 大阪府大阪市生まれ)

3年次生 山田 ひまり さん (2001年 兵庫県神戸市生まれ)

私たちの暮らしが豊かになるにつれ、世の中にはモノがあふれ、近年は衣料や食品のロスなど問題も。そんな数々の社会問題解決を目指し、商学部のゼミで立ち上げたプロジェクトがある。自分たちの手で廃棄衣料や廃棄野菜を活用して商品化し、話題を集めたこのプロジェクトに取り組む学生たちに話を聞いた。

●自分たちの手で社会問題解決への第一歩を

ベンチャー論を中心にさまざまな組織現象について調査研究を行っている商学部の横山恵子ゼミ。このゼミで始めた2つのプロジェクトが注目を集め、関西SDGsユースアクション2021で優秀賞、近畿経済産業局長賞をそれぞれ受賞した。人の生活に深く関わる



村松晃太郎さん

衣・食に着目、廃棄商材に“魔法”をかけて新しく生まれ変わらせる活動に取り組む、その名を「魔女プロジェクト」という。「僕たちはソーシャル・アントレプレナーシップという社会的課題を解決する起業の勉強をしています。その中でビジネスプランを自分たちで作成し、実際に商品を企画・販売してみたい、という思いで始めました」と話すのはゼミ長を務めた村松さん。

●問題解決へ繋がるビジネスプランを考案

魔女プロジェクトには、廃棄衣料問題に取り組む「衣の魔女」と廃棄野菜問題に取り組む「食の魔女」の2チームがある。「衣の魔女」チームが取り上げた廃棄衣料は、1日あたり約1,300トンが埋立・焼却されており、埋立地の不足や焼却時に発生する二酸化炭素による地球温暖化の問題を抱えている。「先生のお知り合いで制服・ユニホームを製造している株式会社チクマさんは以前からSDGsに取り組んでおられ、さまざまな理由で制服になることができなかった未活用生地を、車の緩衝材などにリサイクルされていたんです。私たちはこのダウンサイクルをアップサイクルにできないかと考えました」と語るのは竹内さん。初めはペット衣料など複数案で検討したが、生地の素材を考慮しポーチとトートバッグを商品化することとなった。



一方「食の魔女」チームは、廃棄野菜に着目。品質に問題がないにも関わらず、形や色味が原因の規格外野菜や需給調整などで出荷できない野菜は、年間約430万トンともいわれている。それと同時に災害備蓄食の廃棄問題、いわゆる非常食の食品ロス問題にも学生たちは着目した。「以前から廃棄野菜で商品を製造していた開屋本舗株式会社さんとお話する機会があり、大阪・富田林特産の高級食材である海老芋も出荷されないものや未活用部位がたくさんあることを知りました。この海老芋を使ったポタージュスープを美味しく缶詰に加工できれば、非常食の“美味しくないと”“味気ない”というイメージも払拭して、2つの社会問題の同時解決策になると思ったのです」(村松さん)



竹内乃重さん



7月30、31日に阪急茶屋町会場で開催された「梅田ゆかた祭2022」に出店した横山ゼミ



〈エビモポタージュ〉

今までのエビモポタージュにトリュフをプラスした新商品。廃棄野菜を使用し美味しく栄養満点。常温ですぐに食べられ、非常食として3年保存が可能



〈ばね口ポーチ〉 片手で開け閉め可能で開けっ放しにならず、入れたいものを自由に入れられる



制服の未活用生地を使用したポーチとトートバッグ。福祉事業所の障がい者の方々によって一つずつ手作業で作られ、丈夫で良質な仕上がりになっている



〈トートバッグ〉

ノートパソコンが楽々入る大きさ。丈夫だからたくさん荷物を入れても安心!



横山恵子ゼミ
Instagram & ウェブサイトで
情報発信中!

加えて、両チームが取り組んだのは障がい者の賃金問題。「衣の魔女」チームは縫製を中心とする商品製作を、「食の魔女」チームは缶詰のパッケージデザインを、通常賃金の約2〜4倍の額で福祉事業所へ発注し、問題解決への道を拓いた。

●商品化、そしてクラウドファンディングへ

風味豊かな味わいに完成した「ちょっとリッチなエビモポタージュ」、ユニバーサルデザインで仕上げた「ばね口ポーチ」「トートバッグ」は、エンドユーザーになぜその商品をつくることになったのかと、その商品がもつ背景も伝えるためクラウドファンディングを実施し、それぞれ目標額を達成。「支援者の方々からは、「社会問題解決に貢献したい」「プロジェクトに共感した」という声が多くありました。ストーリー性が伝わったから、成功に繋がったと思います」(村松さん)

慣れないビジネスプランの進行では、貴重な経験もたくさんできたという。福祉事業所にアポをとってプロジェクトの説明をするなど自分たちで提携先を開拓するのは緊張したが、共感や興味を示してくれる担当者も多く、事業所利用者からの「楽しみ」「早く作りたい」との声には喜びを感じた。いろいろな企業や事業所といった複数に関わるビジネスのため、意思統一や意見のすり合わせといった連携の難しさにも苦労の反面、勉強になることが多かったという。「ビジネスとはいつでも人対人、相手の状況も考慮して進める大切さを感じました。そして人の熱意や誠意は、真剣に伝えようと思えば伝わるということも学んだ気がします」(竹内さん)。「僕はゼミ長としてアドバイスしたり一緒に取り組んだりしながら、自分の考えがあってもまずはチームで共有したり相談して物事を進

めることがプロジェクトでは大事だと。時間がかかっても、それがいかに重要かということに気付くことができました」(村松さん)

●受け継がれる「魔女プロジェクト」の未来

今年度からは、後輩たちがこの魔女プロジェクトのストーリーを引き継いだ。「吉本興業のお笑い芸人の方に来ていただき、漫才ネタの作り方を教わりながら、漫才形式の宣伝用CMも撮影したんです。そして「食の魔女」チームでは、既存のスープにトリュフをプラスした「ほんのりトリュフのエビモポタージュ」も販売を開始しました」と楽しそうに話すのは山田さん。「衣の魔女」は社会問題解決へのストーリーを重視して売るといった方向性を残しつつ、「お洒落だから欲しい」と思える新たな商品づくりに取り組んでいます。和紙素材で作ったデニムの未活用生地を商品化したり、シリーズロゴを新しくしたりタグの色を変えるなど、ファッションブルなデザインに進化させたいです」と意気込むのは中山さん。

「去年のクラウドファンディングを見てくださった方々からお声掛けをいただき、今年は地域のイベントへの参加や百貨店へのイベント出店といった実店舗での販売も決まっています」(山田さん)

いくつもの社会問題解決に向けてのストーリーに、進化し続ける魅力ある商品で更なる販路を展開するなど、ますます盛り上がりを見せる魔女プロジェクトから今後も目が離せない。



中山雄賀さん



山田ひまりさん